近畿支部活動報告

毎年近畿支部は、ＰＷやサンマパーティーなど活発に活動を続けています。近畿支部のＨＰから引用させてもらって、ＰＷを中心にその活動の一部をやまざとで紹介させていただきます。
（注：以下の内容は、ＯＢ会事務局が近畿支部のＨＰから平成 22 年 11 月～平成 23 年 10 月までの活動について抜粋をしたものです）

１．粟鹿山ＰＷ

開催日　H22.11.13
参加者　16 名
コース　粟鹿神社＝自然学校登山口～展望台（昼食）～粟鹿山～展望台～登山口＝よふど温泉

西宮市の小学校が自然学校で使っている道、急であったがしっかりした歩きやすい道であった。杉林が多いが、途中にいのしし柵、堰堤、林道などがあり登っていても気分がまぎれる道でもある。

展望台からの稜線は、NTT の巡視道路を歩くことになるが、横列でしゃべりながら歩くには便利な道だった。

２．甲山イブイブＰＷ

開催日　H22.12.23
参加者　17 名
コース　阪急夙川駅＝柏堂町（北山植物公園）～展望岩～北山貯水池～甲山麓（昼食のち解散）

今回は、忘年会を兼ねての山行き、体脂肪収支は大幅増になったはず。昼食は 4 時間かけてしまった。

また、植物園～北山貯水池の道はやや遠回りであったが、稜線を歩いた。風化花崗岩の大岩がある明るい道でなかなか好評であった。行き先の割りには、大きなザック、しかも目的地の前後は歩いたので気持ちだけは本格的登山、それが爽快だった。

12 月の企画はＩ豫さん。昨年はダイヤモンドダストが煌めく中での山鍋、今年もそれをやろうというのだ。ただし、寒かった反省に基づき山鍋に適する場所を探す。少し歩けて、帰りは千鳥足でも大丈夫な場所。しかも環境重視。寒くても風がこない条件で…。ところが、探せばあるものだ。屋根つき、水道はもちろん、バス・トイレ付である。バスといっても風呂ではない。本物のバスなのだ。これなら最悪でも帰るには困らない。

集合は、阪急夙川駅 10 時。10 時にならないのに 10：10 発のバスがもう来ていた。大きな荷物があるので、とにかくバスに乗り込む。そうしているうちにバス内で全員が集合した模様。17 名もいるので一応確認する。いつもの集金係りの Ce 子さんが手際よく集金開始だ。バス代 210 円は各自払いだ。その大きな荷物の我々は標高 170mの柏堂町で下車、そこが今日の出発点・北山緑化植物園なのだ。

山での鍋はうまいがややこしい面もある。長時間の火器となると背の高い山用のコンロでは不安定。そこで家庭用コンロを使うことにした。17 人だから 4 台あればゆったりと食えるだろう。ただし、ザックへのパッキングが難しい。野菜も嵩張るし圧縮はご法度だ。だいたい贅沢には非合理性が付きまとう。金の問題ではない。そこに山生活の楽しさがある。学生時代に北アルプスへ持っていった塩さば、運ぶのに困るが、山では超贅沢な食い物だった。だから、今日はみんな大きなザックを持ってきている。F 井さんなんかは 70L のザックである。一応、個々にあわせボッカレベルを決めておいた。「５kg 超級」「５kg 以下級」「お玉超級」。以下というのは安心だが、超というのは上限がないということだ。地上に置かれた荷物を各自の判断で適当に取っていった。多分不公平があるのだろうが、納得の範囲である。ま、善しとすべきだろう。

登山？開始。今日の山行きの目的地との標高差は約 50m。だから、みんな感覚的には舐めている。手入れされた公園から猪柵の外に

出た。いきなり先頭を歩いていたＩ豫さんが最初の池で道を間違えていた。少々間違えても大きな支障はない。次いで急な登りとなった。防寒具で身を包んでいた人は早速汗をかいてしまった。最初にいきなり 40mの高さを稼ぐのだ。穏やかな天気だけに厚着は禁物である。登りきったところが展望岩。今日はゆっくりでいいのでもう大休憩。標高 200mそこそこなのにすこぶる展望がよい。さすがに断層の崖の上という感じである。穏やかな天気、ヤッケを着ているぐらいがちょうど良い。大きな岩がゴロゴロしているので、大いに遊べる。まるで北アルプスにいる気分だ。

貯水池まで来ると、今度は会場が心配になってきた。レンガ敷きに御亭、広々とした前庭、池まである広々とした空間。使用料が無料であるだけに先客が入るのを恐れた。ここには水道、水洗トイレ、それにバス停までもが完備された理想の場所なのだ。これまで、こんな冬空に外で宴会をするのはよっぽど変な連中だと高をくくっていたのだが、今日の穏やかな天気、凡人である我々が行くのだから、他にそのような人がいてもおかしくない。貯水池でのトイレ休憩をしている人をよそに、先発のＩ豫さんは場所確保のため対岸に向けて急いだ。

やはり、我々は凡人ではなかったようだ。さりとて変人でもない。目的の場所は貸切状態だ。 住み心地が良いように幔幕を張る。戦国武将はよく考えたものだ。わずかな風でも長く居ると冷える。ザックから幔幕用のブルーシートが取り出され、御亭の柱に取り付けた。風も弱く向きがいいので前方は開放でもよさそうだ。思い込んでいたよりも柱間の距離が短く、シートが余ってしまった。もって来てくれた人には申しわけないことをした。幔幕を張るとすごく居心地がよい。さりとて適度の高さなので開放感もある。市中だったら通報され即警官がやってくるだろうに。

宴会開始の掛け声もなく、もう金井さん差し入れの穴子を焼いているではないか。K 岩さんの奥さん手作りのシメサバもある。鍋が始まる前の試食とはいえ全員が試食している。穴子もシメサバも酒のアテに最適な逸品。鍋をそっちのけで乾杯することになった。女性はサンタ風のエプロンを纏っている。6 人もいれば、すごく華やかだ。知らない人が見れば介護施設の介護人のようにも見える。

いよいよ本番の鍋が始まった。

「こちらは西宮消防署です。ハイカーのみなさん、山火事に気をつけましょう…」、「ここで火を使うことは禁止されています…」下見の時、広報車がスピーカでよくがなっていた。「ここでの焚き火は良くないよね～」我々も頷いたものだ。

この寒空だからか、幸いそんな音声は全く流れてこなかった。都会の公園でホームレス達がするのとほぼ同様の形式で 4 つの鍋を取り囲んだ。まあまあのゆったり空間である。

食っても食っても素材は尽きない。豆乳鍋、鳥味噌鍋、水炊き鍋２、好きな場所に移動し、食うほどに飲むほどに時間が知らない間に過ぎていった。白菜、菊菜、各種の魚、きのこ類、水菜、豚ロース、これだけ食えば満腹。満足＆満足。最後にうどん。「稲庭うどんはやはりうまいね」細くて歯ごたえがあり、お代わりをした人もいた。F 井さん差し入れのリンゴのデザートもあった。信州まで車を飛ばして仕入れてきたという念入りのリンゴだった。みなさんやることがすごい。酒も、「ビール」「奥能登の大慶」「西条の賀茂鶴」「明石の空の鶴」「サントリー山崎」「河童という名の焼酎」「サントリーハイボール」「赤ワイン」「何かの果実酒の年季もの」「H22 年度 15 期会ラベル添付の特製能登ワイン」ラベルは U 馬さん制作のもの。飲兵衛の M 宅さんが呑みたいのをこらえて、このＰＷに持参してくれたらしい。

まだまだあるぞ。今回は羊羹も豪華だ。U 野さんが信州まで「小布施の栗鹿の子羊羹」を買い求めてきた。そのついでに仕事もしてきたという。M 代さんは、「虎屋の羊羹：夜の梅」を買うために京都に引っ越ししたそうである。それが偶然にも M 所さんの勤務地に近かったとか…。やはり 15 期の連中は根性が違う。

こんな羊羹だからこそ、やはり大中小で食わねばならない。「満腹の人は棄権でもいいですよ」とのことだったが、誰も棄権する人はいなかった。この会を象徴しているように思えた。元来ならば、抹茶でいただきたいところであったが、T 村さんが急遽参加できなくなり、ドリップ・コーヒーでいただくことになった。後片付けはテキパキ、ゴミは全て良

識のある人のザックに収められた。

ちょうど来たバスにＡ山夫妻、Ｍ代さん、Ｍ宅さんが乗った。残りは来た道をショート・カットで戻った。往きは山道を少し歩き異空間（あれはサンタの国だったか…）に辿り着いた。そこで山鍋を楽しみ、帰りは山道を歩き現実空間に戻る。今回の山行きはそんな意味で二つの空間をワープした理想的な山行きだった。たとえ、異空間で走っていたバスが偶然に現実空間に入ってきても、異空間から現実空間にワープするバス代が 210 円で、現実空間だけのバス代も 210 円だったとしても、換言すれば、歩くことでバス代が安くならなくても、それは全く気にすることではない。金を超越し、豊かな思い出が残るならば、その非合理性は最高の贅沢と呼ばれるものであるはずだから…。

３．虚空蔵山ＰＷ

開催日　H23.1.22
参加者　17 名
コース　ＪＲ藍本～酒滴神社～表参道～虚空蔵堂～尾根分岐～虚空蔵山（596ｍ）～分岐～最低鞍部～陶の郷

長らくの冬型の天気図のあと、雪&氷を考え念のため簡易アイゼンを持参したが、当日の穏やかな天気のため使うこともなく快適な山行きを楽しめた。

登山道も良く整備されており、虚空蔵山の展望も素晴らしい。

４．中山連山ＰＷ

開催日　H23.2.26
参加者　13 名
コース　ＪＲ中山寺～阪急中山～中山寺～中山梅林～（足洗川道）～天空塚～頂上展望所～中山最高峰～（稜線道）～中山寺奥の院～大林寺～阪急清荒神

天気も良く、梅林も開花期に入り、多くの登山者が予想されたが、登りは足洗川の道だったので、人も少なく比較的静かな山行きとなった。13 名の大所帯、天空塚のあたりから登山客があちこちで弁当を広げているので昼食も心配したが、頂上展望所は貸切状態であった。

そこでの昼食は、まさに富山のご馳走が並べられた感がある、贅沢な一日となった。大中小も、蒲鉾、昆布巻き、京観世、福砂屋のカステラとなかなか繁盛していた。

道も食事も平凡そうに見えてなかなか変化のある山行きでもあった。

５．大岩岳ＰＷ

開催日　H23.3.26
参加者　8 名
コース　JR 道場～千刈ダム～大岩岳～東大岩岳～丸山湿原入口～西谷森の公園～境野＝JR 武田尾

迷いやすい山、しかも松茸シーズンには入山禁止となる山域を歩いた。ここの山域は断層による砂礫の風化が激しいのか、あちこちに砂山が見られた。そこでは、松の低木が生えているために展望がよく休憩適地が点在する。

下山は、東大岩岳からの稜線道を使ったが、道の整備状況はあまりよくなかったが、展望もよく変化に富んだ快適な道であった。下山後の境野バス停までの道も懐かしさを感ずる里山風景に満ちていた。

６．蓬莱山ＰＷ

開催日　H23.5.14
参加者　15 名
コース　（往）JR 志賀＝びわ湖バレイ・山麓駅++山頂駅（打見山）～笹平～蓬莱山～小女郎ヶ池
（復）機動隊：小女郎ヶ池～蓬莱山～笹平～山頂駅++山麓駅（使える交通機関はすべて使う集団）
足軽隊：小女郎ヶ池～蓬莱山～金毘羅峠～山麓駅（道だと判断すればとことん歩く集団）

今年度の最高峰（1174.2m）の山、しかし、登りはいろいろあって選択制になっていた

が、その約 800mの登りは全員ロープウェイで行くことになった。山麓駅が標高約 300mだから、実質登っていないように見える。が、打見山から一旦笹平に下り、蓬莱山に登り、そこから、小女郎峠を経て小女郎ヶ池に至るので、多少上下動はしたことになる。下りは、足軽隊が標高約 800mを駈け下りた。
打見山～蓬莱山はスキーゲレンデであるが、蓬莱山から南はアルプスのプロムナードコー
スを感じさせる展望のよい高原歩きであった。

序章（集まり）

このＰＷは、実に天候に恵まれた一日。パーティーも離合・集散しながらも決め所ではバッチリと集合するなど、見事なまでの山行きでした。乗ってくるはずの新快速に、はたまた堅田で湖西線に乗りかえるも仲間はあまり見えず少々心配したが、集合地・志賀駅にはバッチリ全員が揃う見事さ、これは後の見事な曲を想起させるものだった。近くの人は早めに駅に来ていたらしい。ここでの特記は、湖西線の座席に魚が乗っていたこと、元、湖人のＵ野さんの解説では「ニゴロ鮒」ではないかとぞ。

第一楽章（ゴンドラ）

バリエーションを認めながらも先ずは全員がゴンドラに乗る。そして全員が揃って小女郎ヶ池まで行くことになった。今回の全曲を流れた隠れた動機でもあった。

第二楽章（山頂での憩い）

今日の運だめし。こんな快晴に運だめしもないだろうが、クジによって当たる鈴の大きさが違うというわけだ。初参加の高田さんと荷物の重い伊豫さんが大当たり。鈴が大きいと音が大きいと思われるだろうが、そのようなことはない。小さな鈴が綺麗な可愛い音を鳴らしていた。

打見山～蓬莱山はスキーゲレンデである。五月晴れに心地良い風が吹く。木々がないのですこぶる展望が良い。眼下に琵琶湖が大きい。道は芝地で緩そうに見えるが一汗かく。蓬莱山からの眺めはまさに 360°。一等三角点の威厳どおりである。Ｉ豫さんがあちこちの山地図を出して、山を説明する。ここは彼にとって庭のような山なのだ。バリエーションルートのリフト隊がクリンソウ観察を終えて登ってきた。そのとき携帯が鳴った。Ｓ林さんがすぐそこまで来ている。しかも早いテンポでやってくる。なんと蓬莱山頂で携帯が通じるという幸運にも恵まれたからだ。ならば、小女郎ヶ池でちょうど会うためには先にここを出ねば…。

第三楽章（展望の中を歩く）

蓬莱山からの下り道は、おお、なんとサウンド・オヴ・ミュージックの世界ではないか。眼下に琵琶湖、遠く京都の街を眺め草原・小潅木の中を下る。そのような、ゆったりとした多種の楽器が奏でる中、タタタと速いテンポのスケルツォ Ｓ 林さんの足音が入り込む。そして、ついに小女郎峠で合流。その感動のまま。小女郎ヶ池になだれ込んだ。

第四楽章（峠の風）

小女郎ヶ池は今日の目的地、ここを食事＆お茶会会場と決めた。峠では風が吹いていたが、ここは風もなく暖かだ。平地に簡易テントを張り、シートを敷き詰めた。Ｉ豫さんが手早くスープを作る。空腹の胃袋においしさが広がる。果物が回ってきた。プチトマト、プチプチトマト、ネーブル、グレープフルーツ、大阪のどこかで取れたみかん。新鮮な味がした。

第五楽章（還暦）

世の中めでたい人が居る、還暦だという。そのめでたいＭ所さんが宴会でもらったという赤い頭巾とチャンチャンコを持ってきた。そこで、曰くありげなこの伝説の地で記念撮影ということになった。ならば、Ｋ岩さんも古稀なはず。メデタイ!! かくして、この風景一杯をめでたい人が埋め尽くすべく、つなぎ写真で撮ることにした。

お茶会の菓子、枚方のどら焼きとカキヤマは全員に配られた。さらに、とら屋の羊羹で大中小を実施。結果は、次のとおりの偏りのあるものであった。切り分けた最終の「小」の分配量は長さ2cm巾５mmぐらいの、小さくともそれは羊羹と呼ばれる代物であった。結果は、大：７人、中：３人、小：５人。続いての福砂屋のカステラの結果は、大：10人、中：４人、小：１人！

全体の 1/5 を食べるものがいる一方で、1/20しか食べられないもの…。羊羹以上の格差があった。歎くなかれ。世の中は不条理にみち満ちているのだ。

K 井さんの京土産・黒蜜、和三盆、メープルシロップのラスクもうまかった。Ck子宗匠の一応の指揮下、山鹿流の作法にのっとって？、Ce子、M代、S美各宗匠が点てた茶は、絶品でおかわりが相次いだ。今回は茶碗も５個が準備され、ゆったりとした気分で茶会が進んだ。おいしかったのは茶によるとこが大きい。茶は、S 子さんが買い求めた宇治茶の生産地・南山城村の茶であった。この風景、場所は伝説のある小女郎ヶ池、茶を喫する好条件が揃っているのだ。茶碗も、お茶の先生からいただいたもの、おばあさま手作りのもの、古典に出てくる玉水の里で買い求めたもの、息子の嫁が母上様に買ったという記念のもの、山岳茶のために特に選んだもの、そのいわれがまた楽しく、笑いが絶えなかった。

第六楽章（コーヒータイム）

コーヒー好きな人のため、上等とはいえないがドリップコーヒーもあった。蓬莱山からわずか30分の距離の別天地、小女郎ヶ池。ここは登山道のほぼ十字路にあたる。よってたくさんの人が通り過ぎて行く。テントが壁になって我々不埒な連中の仕草を隠すのに役たってくれた。

そうこうしているうちに、ここに2時間以上も遊んでいたことになる。そろそろ小女郎ヶ池にお暇する時刻だ。テントをたたみ別れを告げた。

第七楽章（石佛の道）

小女郎峠へはすぐであった。蓬莱山も間近に見えている。ゆっくりゆっくり登る。この道には石仏が多い。しかし、お地蔵様ではなく別の仏様のようだ。それを求めて、窟屋へも寄ってみた。後背に火を持っているからお不動さんのようだ。ここは修験道の道？、行きはサウンド・オヴ・ミュージックでも、帰りはやはり日本の山だ。

第八楽章（再び蓬莱山へ）

蓬莱山の登りで、パーティーを2つに分けることにした。ゴンドラ隊と足軽隊である。足軽隊は片道 1000 円のゴンドラ運賃を浮かす作戦である。高度差800mと1000円という比較できない単位換算には複雑な数式が背景にあるのだろう。一方、ゴンドラ隊は、最初から割り切って JAF 割引を利用し、往復1300円の切符をゲットしている。よって、彼らの行為は 800mの下山労働が 300 円であることを知り抜いている。1 時間半で歩けば時給 200 円の労働ということなる。山登りというのは、金では換算できない価値があることを物語っている。足軽隊は、やはり足が軽い。すぐに蓬莱山頂に辿り着き、我々に手を振って下山していった。

第九楽章（水仙の咲く丘）

蓬莱山でさらに、リフト隊と散策隊に分かれた。リフト隊はリフトの１日券（1000円）を購入したため、券を使う義務があるようだ。来るときは打見山から笹平まで歩いたので、まだ300円しか使っていない。これは、主婦の感覚からは絶対に許せない状態だ。リフトで下山するとトイレに早く到着できるという利点もあるようだ。散策隊にもトイレに行きたい人はいる。しかし、標高 100m下りで300 円を払ってリフトに乗るというのは主婦の感覚から許せないのだ。

最後の丘を越えたときに、思わず息を呑んでしまった。馬鹿にしていた水仙畑がすごいのだ。しかも逆光の中に輝く水仙は、ソフィア・ローレン主演の「ひまわり」を感じてしまった。多分、主婦感覚はどこかに飛び去り、世の中の矛盾を受け入れさせる美がそこにあった。リフト隊も、もう一度リフトで蓬莱山に登り水仙畑を見に行った。賢い主婦二人であるが、もちろん、下りはリフトを利用せず、ゆっくりと水仙を愛でるためにである。

第十楽章（笹平にて）

水仙の見える笹平で長く休憩をした。Ｉ豫さんが早速コーヒーを入れてくれた。素晴らしい場所だ。ここの休憩所では無料で紙コップも使えるようになっている。トイレを使い、紙コップをいただいては申しわけないと思ったが、1 日使えるリフト券を 2 人も購入しているので、まあ、許してもらえるだろう。だって、リフトに乗っている人はほとんどいない状況だから、二人の貢献度はすごく高い。足軽組の下山を調整すべく、ゆったりとした時間を楽しんだ。

最終楽章 1 番（下山）

16 時発のゴンドラに乗って下山した。途中で足軽組から下山したとの連絡が入った。何と言うタイミングの良さ。ゴンドラを降りると足軽組が迎えてくれた。ゴンドラ組と足軽組との心がここで一つになった。啐啄（そったく）同時とはこのようなことを言うのだろう。今日歩いた稜線がはるか上方に見える。記念写真を撮った。初参加の S 子さんを乗せたＩ豫号とは山麓駅でお別れだ。

最終楽章 2 番（思い出ができた）

残りは、さらに 320 円のバス代を浮かすべく志賀駅に向った。下るのみだから足軽組 2 の気分である。途中、樹下神社に立ち寄り無事志賀駅に到着した。今日の歩数は、23560 歩と 14227 歩。同じ山行きなのに、その違いは、300 円分の下山の歩きらしい。M 所さんに、この 300 円とバス代 320 円で計 620 円分、おいしいビールが飲めますねといっていたら、飲兵衛の執念だろうか、どこかで 50 円を拾ったとのこと、「620 円でなく 670 円です」との修正の報告があった。15 期の飲兵衛連は山科にて深夜まで飲んだとのこと、670 円ですまなかった筈、それは今でも謎である。しかし、参加者それぞれが楽しい一日であったことは間違いなさそうである。

７．愛宕山ＰＷ

（H23.5.25　悪天候のため中止）

８．百丈岩ＰＷ

開催日　H23.6.12
参加者　7 名
コース　JR 道場～あけぼの茶屋～百丈岩～静ヶ池～（稜線道）～名塩無線中継所下～赤坂峠

あけぼの茶屋からクライマー達が居る百丈岩の基部を見学し、一般コースで百丈岩の岩上に立ち 360°の展望を満喫＆昼食。静ヶ池経由の縦走形式で南下した。稜線で小雨が降ってきたので、更なる山道を止め、歩きやすい方の住宅地の舗道を歩いた。

９．サンマパーティー

開催日　H23.10.1～10.2
内　容
第 1 部　バーベキュー、シルクロード公演、老人のためのストレッチー体操
第 2 部　お茶会、ワンゲルの歌、中国茶芸
第 3 部　活動報告
第 4 部　バーベキュー
第 5 部　日帰り温泉、討論会
第 6 部　重低音演奏会（寝たもの勝ち？）
第 7 部　野外朝食
第 8 部　お茶会、剪定実技発表
第 9 部　うどん打ち講習、うどん試食
第 10 部　お茶会、後片付け

「ＯＢ会中部支部」をつくろうかと（協力していただける方の募集）

24 期　坪井 陽典

名古屋で好き勝手に生きている 24 期の坪井です。私に与えられたスペースは半ページですので早速本題に入らせていただきます。

ＯＢ会では、すでに関東支部、近畿支部が立ち上がっています。それを横目で見つつ、４～５年前から「中部支部もあれば。」と思い、３年前のワンゲル 50 周年（平成 20 年 9 月）のときにも一部の方々とは中部支部創設の話

をさせていただきました。

しかし、それもそのまま立ち消えで、今日に至っているというのが現状です。

もうそろそろ本腰を入れて立ち上げないと、このまま永久に立ち上がらないままだろうと思い、今回原稿を書いた次第です。

ただ、ＯＢ会中部支部を立ち上げると言っても、パッと考えただけでも次のような問題があります。箇条書きにすると、

１．協力していただける方はいるのか？

文書発送等の事務局の仕事は、私のところでするつもりです。しかし、企画等は私一人では無理ですし、しかも、私一人ではＯＢの方々の意に沿わない、独りよがりのものになる恐れがあります。ですから、協力していただける方が不可欠です。

２．中部支部の構成員の範囲

愛知・岐阜・三重は中部としても、静岡は関東？中部か？長野はどうか？

３．中部支部で何をするのか？

これは、活発な近畿支部の方のお話が参考になるかと思っています。

４．今後の中部地方のＯＢの方への連絡

個人情報保護が厳しく問われている昨今、ＯＢ名簿を頼りに、勝手に文書を発送してよいものか。

等々山積しています。

興味がある、なしに関わらず、協力していただける方がいらっしゃいましたら、次のところにお電話・FAX・メールをお願いいたします。電話は留守番電話のときもあるかもしれませんが、「ワンゲル△△期の○○です。」と吹き込んでいただければ、こちらから折り返しお電話をさせていただきます。

また、こちらからお電話等で連絡をさせていただくＯＢの方もいらっしゃるかと思いますが、何卒よろしくお願いいたします。

弁護士　坪井 陽典（つぼい ようすけ）
〒460-0002
名古屋市中区丸の内 3－23－8　フレーヌ丸の内ビル 2 階 A01
はるき法律事務所
TEL　052-951-5115
FAX　052-951-5119
e-mail　info@haruki-law.com

ハイデルベルクとオックスフォード ２つの大学都市を訪ねて

17 期　小島 敬

ハイデルベルクとオックスフォードという２つの大学都市を訪ねる機会がありましたので、レポートします。

１．ハイデルベルク

「お城の中の大学」に憬れて金沢大学に入学したのは、39 年前の 1972 年でした。「ドイツのハイデルベルク大学と並んで世界にたった２つしかない『お城の中の大学』」というのが、当時の金沢大学の謳い文句でした。大学卒業後も、ハイデルベルク大学はどんな「お城の中」にあるのだろうと、ずっと気にかかっていました。出張や観光でヨーロッパへ行くことはあっても、なかなかドイツに寄る機会はありませんでしたが、2010 年 7 月、ようやくハイデルベルク大学を訪ねることができました。

７月２日（金）、チューリッヒからドイツ特急 ICE でハイデルベルクに入りました。ハイデルベルク大学で開催される博士号の学位授与式に出席（もちろん私がもらうわけではありません）するためです。1386 年に創設されたドイツ最古のハイデルベルク大学（学生数３万人弱）は、ノーベル賞受賞者を多数輩出している世界的な大学です。

旧市街中心部のマルクト広場に面した築 400 年を超える建物にあるホテル Zum Ritter にチェックイン。スーツに着替え、大学広場にある旧大学校舎へ。大学の 500 年祭を記念して 1885 年に改装された重厚な大講堂で授与式が開催されました。この日は、人文系の 100 名強に博士号が授与されました。学生に倍する関係者（親族や友人達）が出席していました。学生がひとりずつ研究科長に名前を呼ばれ、学位申請論文の内容がユーモアを交えて紹介され、学位記が授与されていきました。ドイツだからお堅いイメージを予想していましたが、日本の大学院の修了式よりずっとカジュアルな雰囲気でした。

７月３日（土）、午前はハイデルベルク市内（城、旧市街）を散策しました。ハイデルベルク市は人口 14 万 5 千人、ドイツにおけ